

J E C の源流と歴史的遺産 3

- 古代教会の正統信仰と J E C -

一宮基督教研究所 安黒務

使徒時代から古代教会へ

前回は、「使徒時代の信仰」を忠実に継承している群れとしての J E C についてみました。今回は、「古代教会の正統信仰」と J E C の関係についてみてまいりましょう。

信仰心か、信仰の対象か

日本人のカミ観は本居宣長ⁱの「**何にまれ、尋常(よのつね)ならず、すぐれたる徳のありて、可畏(かしこ)きものをカミとはいうなり**」に代表される「雷、竜、樹霊、狐、そして山も海もカミになってしまう」もので、**信仰の対象より信仰心を大切なもの**と考えてきました。それに対して、キリスト教会はその初めから「**対象としての信仰**」を「**態度としての信仰**」に優先させてきました。たとえば、結婚について考えてみますと、ある女性が結婚したいと思います。「結婚したい」、これには間違いはありませんが、結婚という重大な問題を考えると、いろいろと条件が必要になってくるものです。だれでもまず考えることは、変わりなく愛してくれるだろうか？次に、生活能力はあるだろうか？さらに真実な人か？学歴は？家柄は？顔かたちは？といろいろと考え、この人ならば生涯をまかせることができるかと心を決めると、結婚することになるのです。どんな人であっても、「私はもう婚期が過ぎたから、とにかく結婚したい。もう相手がどうのこうのとは言っておれない。愛してくれなくても、生活能力がなくても、対象なんて問題ではありません。」さらに「対象なんてなんでもかまわない。結婚さえできれば、それがたとえ、狐であろうが、豚であろうが」などと言う人はひとりもいないと思いますⁱⁱ。信仰も同じことです、**対象こそ第一のものです**。

神秘主義的信仰ではなく、信仰告白的信仰

そのような意味でキリスト教信仰は、「鯛の頭のようにつまらないものでも、それを信仰する人には尊く、神仏同様の靈験をもつに至る」といった**神秘主義的な信仰**ではなく、最初から明確な対象への**信仰告白的信仰**であると言われます(例:申命記 6:4 「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。」、マタイ 16:16 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」)。一世紀の教会においては、「使徒たちの教え」(使徒2:42)、「伝えられた教え」(ローマ6:17)、「聞いた健全なことば」(テモテ1:13,14)などと呼ばれている一定のまとまった信仰箇条のようなものがあり、それが**宣教と教会形成の基盤、土台**となっていました。さらに、教会はその最初から**異端に対して正統的信仰を弁証**しなければなりません(ガラテヤ、コロサイ、ヨハネの各書参照)。

教会内に組織神学的活動始まる

以上のような要素を背景として、特に二世紀頃から教会内に組織神学的な活動が始まり、

同時に信条というものが発達していきました。その最古の例が、使徒信条と酷似し、当時の教会の基本的教理を反映しているものと考えられている「古ローマ信条」です。これは二世紀にローマの教会が持っていた信仰告白文であったとみられています。初期の宣教と厳しい迫害の時代を経て、四世紀には念願の信仰の自由を獲得しますが、一方で異端説も活発となり、一連の教会会議を開催し、**使徒信条**を含め、**ニカイア・コンスタンティノポリス信条**、**カルケドン信条**、**アタナシオス信条**の四つの公同信条を公にしましたⁱⁱⁱ。

公同信条の内容

これらの四つの公同信条に共通しているもっとも根本的な信仰の事柄とは何でしょうか。それは**三位一体の神観**と**キリストの神・人二性論**および彼による**贖罪のわざ**です。信条と云いますとどこか難しい印象をもちますが、「イエス・キリストの人格とみわざ」について聖書の教えを簡潔にまとめたもので、要点的で短く分かりやすいものです。古代教会のクリスチャンたちは「父なる神と御子イエス・キリストの関係について、またイエス・キリストは神なのか、人なのか」といった課題と格闘し、**聖書の啓示が明らかにしている輪郭**を明らかにしていきました。これらの公同信条は、ローマ・カトリック系、ギリシャ正教系、プロテスタント系の諸教会で受け入れられており、「**世界信条**」とも呼ばれています。使徒信条を礼拝で唱和するとき、「**この信条は世界のすべてのクリスチャンの共通の告白なのだ!**」と確認するだけでもキリストのからだ意識が全世界に広がり、さらに恵まれます。

あらゆるところで、常に、すべてによって

以上、異端との戦いの中で、聖書の啓示に根ざして**異端と正統との限界線**を明らかにしてきた歴史を振り返りました。このようにして「あらゆるところで(公同性)、常に(古代性)、すべてによって(一致同意)信じられてきた」正統信仰の根幹が確立されていきました。JECはエバンジェリカルの一員として、この正統信仰を基本としている群れです。それゆえ、エバンジェリカルとしてのJECは、日本と世界における宣教協力の前進のために**分派的、自己流のあり方ではなく**、常に公同的なあり方を探求していくべきです。「十字架と聖霊」というJECの特色を保持しつつ、常に「**正統信仰の公同性**」を反映させよう**という意識**の中で前進していくべきなのです。

i 本居宣長：1730～1801 名著「古事記伝」に代表される江戸中期の国学者。

ii 滝元明「千代に至る祝福」いのちのことば社、1972、pp.17-18

iii 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、1993、pp.60-67